



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 現代日本語における初対面時の交感発話の特徴：会話の開始部を中心に  |
| Author(s)        | 肖, 潔  |
| Citation         | 国語国文研究, 157, 72(1)-57(16)   |
| Issue Date       | 2021-08-19  |
| Doc URL          | <a href="http://hdl.handle.net/2115/88887">http://hdl.handle.net/2115/88887</a> |
| Type             | article   |
| File Information | Kokugokokubunkenkyu_157_72(01)-57(16).pdf                                       |



[Instructions for use](#)

# 現代日本語における初対面時の 交感発話の特徴

—— 会話の開始部を中心に ——

肖 潔

## 1 はじめに

われわれの日常生活で用いられていることばは、主として情報を伝え合うことが目的である。しかし、情報を伝え合うほかに、「こんにちは」「お元気ですか」などのように、単なるあいさつのために存在することばもある。後者は、「情報内容の伝達よりも、安定的にやり取りできる状況を作ったり保持したりすることに重点のある」(加藤 2004:112) 交感機能を持つことばだといわれている。ここでは交感発話と呼ぶことにする。

従来、このようなことばは言語の主要な機能を担っていないと考えられ、重要な研究テーマとはみなされなかった。しかし、人間のコミュニケーションにおいて、相互に情報を円滑に伝達するためには、その場の会話の環境(会話の基盤)を常に整える必要がある。この会話の環境とは、主に話し手と聞き手の会話が順調に行われるような、会話場面の雰囲気のことを指す。交感発話は、まさにこの会話の場の「雰囲気」(moods) (Firth, 1964:112) を調整するために存在することばである。これは、人間の交流においても不可欠なものではないかと考える。

本研究では、交感発話が出やすい会話の開始部に着目して、社会語用論的な視点から各会話場面に現れる表現の性質・位相・動機づけを考察する。また、その諸相の観察を通して、現代日本語における初対面時のコミュニケーションの一端を明確にすることを目的とする。

## 2 交感機能の概念

本節では、交感機能という概念に関する先行研究を取り上げて紹介していく(Malinowski, 1923, Firth, 1935, Firth, 1964, 加藤 2004, du Bois, 2014, 加藤 2016, 肖 2019)。

「交感機能」は、イギリスの人類学者マリノフスキーの造語 'phatic communion' が発展した言葉である。Malinowski (1923:151) は、'a type of speech in which ties of union are created by a mere exchange of words' (単なるお互いに声を掛け合うことに

よって団体関係が作り出されるような種類の言葉」という定義を最初に提出した。その際、村の人々が夜の焚火を囲んで、目的もなく自由に言葉を交わす (language used in free, aimless, social intercourse) という事例を挙げている (Malinowski, 1923:142)。その後、Firth (1935) は、マリノフスキーが提出した 'phatic communion' という概念を援用し、人間の会話場面では、「個人的な」(individual) すなわち「独白的な」(monologue) 言語の用法が現れるほかに、声をかけ合うことが単に感情的な親近感を推進するか維持する場合のように、一種の「合唱的」(choric) 用法がみられると述べている (Firth, 1935:30、大東訳 1978:41)。また、Firth (1964:111) は、「共感」(sharing) について論じた時、このような親交 (communion) は文化によって定められた紋切り型の決まり文句で強化されている (such communion is enhanced by conventional language formulae laid down by custom) と述べている。そして、多くの会話のやりとりの中で、このような「合唱的」な言語行動は「意見の交換」(exchange of ideas) というより、基調 (keys) や雰囲気「moods」が重要であるとしている (Firth, 1964:112)。

さらに、現代の語用論研究において、交感機能に関する解釈は前掲した加藤 (2004:112) の記述のほかに、「合唱」をデュボアの「共鳴」(resonance) (du Bois, 2014:372) と呼ぶこともある (加藤 2016:43)。加えて、肖 (2019) では、あいさつとあいさつ表現の定義・基準を検討した結果、交感機能は「社交性がある」「情報性が低い」「目的性 (意図性) が弱い」という三つの特徴をもつと主張している。

以上の先行研究から、交感機能の概念をおおよそ理解することができる。しかし、具体的な会話場面における交感発話の特徴は何か、交感機能がどのように表現されるのかということについては、さらなる分析が必要である。

### 3 初対面会話の特質

初対面時に、話者と聴者の会話が順調に進められるように、会話の開始部には交感発話が多用され、交感機能が働いていると考えられる。初対面時の会話場面を分析するには、初対面時の会話の特徴も概観する必要がある。ここでは、主として三牧 (2013) の記述を取り上げる。

三牧 (2013:4-5) では、初対面会話は主に以下のような三つのタイプがあると述べている。

- ①直接会話するのは初めてでもその会話の相手に関する情報は既に有している場合である。
- ②制度的な枠内において交わされる初対面会話の目的や各会話参加者が果たすべき役割が明確な場合である。例えば、医師と患者、店員と顧客などが挙げられる。
- ③社交的な場面で純粋に個人対個人として未知の相手と一定時間、自由に会話することになったような会話場面。例えば、パーティー会場において、誰かの紹介を通じて知り合ったわけではなく、自力で出会った人との会話などが挙げられる。

また、初対面会話におけるもっとも顕著な特徴は、相手に関する情報量が不足していることである。第一に、社会的属性 (年齢・立場) が不明であるため、待遇表現選

扱の準拠枠さえ得られず、言語操作面でも不安定な状態となることである。第二に、話題選択に関しても、既存の背景知識を活用しえず、相互に関心事を探り合いつつ進行することが必要不可欠である（三牧 2013:5）。

本研究では、上記に述べている初対面会話の特徴をもとに、初対面の相手に関する情報量が不足している時、どのようにコミュニケーションを開始させるのかという問題意識を抱えつつ、考察していきたい。具体的には、以下の二点を明らかにしたい。第一に、交感発話の認定と分類を行い、第二に、初対面時の会話開始部にある交感発話の特徴を明らかにする。

## 4 日本語の交感発話について

### 4.1 交感発話の典型的特徴とその分類

本節では、交感発話の認定方法を論じたうえで、分類案を提示する。交感発話の特徴について、肖（2019:243）では、次のように「狭義的な交感発話」と「広義的な交感発話」という二種類があると述べている。

- (1) I 社交性がある・情報性が低い・目的性が弱い表現（狭義的な交感発話）
- II 社交性がある・情報性が低い・目的性が強い表現（広義的な交感発話）

肖（2019）では、この三つの特徴、とりわけ「目的性」について説明不足なところがある。ここで説明を加えると、「社交性がある」とは、安定的な人間関係の形成や維持に貢献することである。「情報性が低い」とは、情報内容の伝達に重点を置かないことである。これは、グライスが提唱した会話の効率性と異なり、配慮表現の特徴として扱う。そして、「目的性が弱い」とは、ゴシップのように、「自由」(free)で「目的なし」(aimless)に些末な話をすることである (Malinowski, 1923:149)。「目的性」は、J.R. サールの「言語行為論」における「発話内の目標（発話内目的）」(illocutionary point)とも関連付けられる。言語行為論 (speech act) は、最初は J. オースティンによって提唱されたが、サールはその枠組みを継承しさらに発展させた。サールによると、「行為には目標あるいは目的が存在する」(Searle, 1969:70) ということであり、発話内の目標を五つのタイプに分類している。それぞれは、断定・断言型 (assertives)、行為指示型 (directives)、行為拘束型 (commissives)、感情表現・表明型 (expressives)、宣言型 (declarations) となっている (Searle, 1979:12-20)。交感発話は、当たり障りのない話を意図なしにすることによって対人距離を縮めるため、伝達行為につながる発話目的が弱いと見なすことができる。

肖（2019）によると、狭義的な交感発話は例としては、(2)～(4)のような定型性のある「あいさつ表現」が挙げられている。

- (2) おはよう。
- (3) こんにちは。

(4) どうも。

そして、広義的な交感発話は感謝・謝罪・祝福のような発話行為を表す表現が挙げられ、「準あいさつ表現」として扱っている（肖 2019:244）。

(5) ありがとうございます。[感謝]

(6) ごめんなさい。[謝罪]

(7) おめでとうございます。[祝福]

ファースによると、交感機能を持つ発話は「独白的」(monologue)ではなく、「合唱的」(choric) (Firth, 1935:30) な言語使用である。そして、そのような発話は、気持ちや感情の「共感」(sharing) (Firth, 1964) を形成することができる。ここでの「合唱」は、かならずしも同時に発話することとは限らない。話し手と聞き手は、同じ言葉で繰り返して相互に呼びかけ、調子を合わせて調和がとれるようなメロディーを作ることを指すとも考えられる。その考え方に基づいて、(2)～(4)のような典型的な交感発話を下記のように説明することができる。

(8) —おはようございます。

—おはよう。

(8) はありふれた典型的なあいさつことばである。「おはようございます」と相手に対してあいさつをする時に、相手も同じように「おはよう」や「おはようございます」と返事することがみられる。このように、同趣旨のことを対称的に言い、同じようなやり取りが繰り返されることが「合唱的」な特徴である。言い換えると、交感発話は、合唱のようにことばの交わりによって、共鳴を引き起こし人間同士の親和性を向上するのである。本論では、この特徴をより明瞭にとらえるために、「合唱的」という言い方を「双方向的（双方向性）」と言い換えることとする。

「双方向的」は、シュゲロフとサックスの隣接ペア (adjacency pair) の概念からヒントを得ている。隣接ペアは緊密性の高い発話対であり、主に①「挨拶—挨拶」タイプ（同種の発話を交換）、②「質問—返答」タイプ（第一ペア成分と第二ペア成分が補完的）、③「申し出—受け入れ／断り」タイプ（第二ペアが択一的）の三種類がある (Schegloff, 1988:110-111)。典型的な交感発話は形式上まさに①の「挨拶—挨拶」タイプで、定型性のある発話を重ねて交換するものである。そのほか、会話参加者の両方も積極的に相手とよい会話環境を作ろうしている意欲がみられる。そのため、本論で提示している「双方向的」とは、形式面では共通性のある言葉を通じ、それと同時に機能面では共鳴を引き起こすことを特徴としている。かくして、交感発話の重要な機能は、会話参加者同士の雰囲気や和やかにするために存在し、「共感性が強い」ということも交感発話の主たる特徴として扱うべきと考える。したがって、典型的な交感発話の特徴は、次の (9) のように示すことができる。

- (9) 典型的交感発話：社交性がある・情報性が低い・目的性が弱い・共感性が強い表現。

典型的交感発話は定型性のあるあいさつ言葉における「双方向的」表現であるとする、次のような定型性を持たない一般的なあいさつ表現でも「双方向的」な機能を見受けられる。

- (10) 部長：お元気ですか。

部下：はい、おかげさまで元気です。部長はお元気ですか。

部長：私も元気ですよ。

(10) は、(8) のように単純に同じことばを繰り返すことで終わるわけではないが、同趣旨で相手の健康を尋ねることによって会話を開始する前のアイスブレイキングをした。これも双方向性があると理解できる。さらに、次のような例がある。

- (11) A：太郎は何考えてるのかな。

B：ほんと、何考えてるんだろうね。

(加藤 2016:42)

- (12) A：今日のメイク、すてきですね。

B：(笑)ほんとうですか?! ありがとうございます。

(11) ~ (12) は、世間話や雑談 (gossip, small talk) に現れる発話で、情動的価値はかならずしも高いわけではないが、命題内容によって多少情報性を持つようになった。(11) では、「太郎の考えについての疑問」ということ、(12) では、「相手のメイクに関するコメント」。典型的交感発話の具体例であるあいさつ言葉より、情報性は高めである。しかし、共感性の面から見ると、(11) では、Bの返事はおうむ返しの反復することによって、「何を考えているか分からない」という状況を共感しあう「共感形成」(加藤 2015:51) となりうる。それに対して、(12) では、重複的な言い返しはみられない。(11) は、(8) のように定型性を持たないが、命題内容上共通性があり、表現機能上も相互に共感を得るような発話であるため、双方向性を持つ発話であると捉えられる。また、「命題内容条件」(propositional content condition) などの「適切性条件」(felicity condition) (Searle, 1969:57-61) により、発話内行為の目的性も現れるのである。例えば、(11) は太郎の考えを理解できない時や分からない時に発した疑問的な心理状態を表しているため、感情表現型である。

一方、(12) では、命題内容上の重複はないが、相手の外見に気づき、注意を向けることによって、相手との人間関係が近接化となる。これは、ブラウン&レビンソンのポジティブ・ポライトネスのストラテジーの一種である (B & L, 1987)。ポジティブ・ポライトネスは、聞き手の「他者に受け入れられたい、よく思われたい」という他者評価の欲求を顧慮するストラテジーである (B & L, 1987:101-103, 滝浦 2008:34)。

このタイプの表現は相手と共感を形成し、相手との距離を縮めることができる。

交感発話は、人間関係の調和作業において「積極的」(話者の意欲)な立場をとるものである。(11) のようにおうむ返しの返答であろうと、または(12) のように相手をほめることであろうと、どちらも聞き手との心理距離を縮めようとしている。聞き手と同じ立場に立ち、聞き手とともに「事柄に直接触れようとする表現の共感性」(滝浦 2008:34) が特徴となる。(11) はあからさまな双方向的な表現であるとする、(12) は「疑似双方向的」な表現である。すなわち、命題内容上重複することはないが、機能上において連帯感を示し、共鳴を引き起こす機能を持っているものである。そのため、交感発話を判断する時に片方の話者の発話だけを見るのではなく、話者両方の発話において、相手と積極的に友好的な関係(人間関係と会話関係)を構築する意欲がみられるかどうかのものである。あいさつ言葉のような典型的交感発話は定型化し、慣習化した親和的な対人表現であるとする、疑似交感発話は決まった表現形式はなく、他者と積極的に触れ合う、ポジティブ・ボライトネスを果たすような表現である。したがって、交感発話の第二段階レベルを次のように設定したい。本稿では、これを「疑似交感発話」として設定する。

(13) 疑似交感発話: 社交性がある、情報性がある、目的性がある、共感性がある表現。

よって、典型的交感発話と疑似交感発話は双方向性がある表現だとみられる。しかしながら、交感発話には、双方向性のほかに、一方向性の特徴を持つ表現もある。前述の例も含めて次のように示す。

(5) ありがとうございます。[感謝]

(6) ごめんなさい。[謝罪]

(7) おめでとうございます。[祝福] (再掲)

(14) お疲れ様でした。「慰労」

(5) ~ (7)、(14) は言語行為論でいう感情表現型の例である。それらの表現の中には、発話内の目標(目的)は、命題内容において特定される事態に関する、誠実性条件(sincerity condition)で特定されるような心理状態を表現することである(Searle, 1979:15)。サールによると、誠実性条件は、話し手が行為を行うことを意図しているかどうかのことである(Searle, 1969:60)。誠実性条件において特定される心理状態が存在する時に、その行為の遂行がその心理状態の表現であると見なされることである(Searle, 1969:65)。ここで、それぞれは、話し手が聞き手に対して「謝意を表す」、「申し訳ない気持ちを表す」、「聞き手の好運に対する喜び」、「聞き手の苦労に対するねぎらう」の表現であると見なされる。このように、発話内力があり、慣習化した言語形式によって相手に感謝、謝罪、慰労、祝福する行為を実現している。

これらの表現は、会話において(8)や(10)~(12)のように命題内容上共通的な言葉を重ねることではなく、話者同士が相互に精神上の触れ合いもかならずしもあると

は限らない。具体的に言うと、相手に対して感謝、謝罪、慰労、祝福などの発話行為を行う時、相手から同じようなことを返答されることはない。よって、これらの表現は双方向性の特徴を持たず、「一方向性」（一方向的）の表現として扱いたい。ただし、「ありがとうございます」は感謝の凡例用語としてあいさつに転用されることがある。その際、話者同士お互いに「ありがとうございます」と言い合うことが見受けられる。その点について、別途論じる必要がある。

しかし、これらの表現は双方向的な表現ではないが、人間関係に貢献がないというわけでもない。あいさつ表現のような典型的交感発話は人間関係に直接的に貢献するものであるという点、このような発話内の目的を持つ行為表現は、間接的に人間関係を調整するものであると考えられる。よって、これらの表現を交感発話の第三段階レベルの表現として扱い、「準交感発話」と名づける。

(15) 準交感発話：社交性がある、情報性が低い、目的性は強い、共感性は当てはまらない表現。

準交感発話は社交の場によく用いられる表現として存在し、定型性もあるため、情報性は低いと考えられる。ただし、発話内の目標が顕著であり、双方向的な共感性も存在しない。

上記の分析をもとに、交感発話の分類を次のようにまとめる。

表1 交感発話の枠組み

| 特徴<br>種類         | 社交性 | 情報性 | 目的性 | 共感性              | 性質     | 例示                       |
|------------------|-----|-----|-----|------------------|--------|--------------------------|
| 典型的交感発話          | 有   | 低   | 弱   | 強                | 双方向的   | 慣習的なあいさつ言葉               |
| 疑似交感発話<br>(タイプA) | 有   | 低～高 | 弱～強 | 強                | 双方向的   | 雑談（天気や健康の話題などを含む）        |
| 疑似交感発話<br>(タイプB) |     |     |     |                  | 疑似双方向的 |                          |
| 準交感発話            | 有   | 低   | 強   | × <sub>(*)</sub> | 一方向的   | 感謝・謝罪・祝福など発話内の目的を持つような表現 |

(\*)：人間関係に貢献するが、命題内容上の共通性があるかつ双方向的に共鳴を引き起こすような共感性には当てはまらない。

表1で示しているとおり、典型的交感発話は、「社交性がある」「情報性が低い」「目的性が弱い」「共感性が強い」という四つの特徴を揃えているものである。社交の場に用いられる決まり文句で、発話の情報内容が少ない。そして、発話の行為目的が弱く、強い共感性が表明される表現で、紋切り型のあいさつ言葉がその例である。疑似交感



発話は二種類のタイプがあり、典型的交感発話のように定型性の高い表現は用いられないが、話者と聴者がともに深刻な話題を避け、ポジティブ・ポライトネスの共感的機能を持つ表現である。タイプ A は命題内容上共通性のある言葉で交わされるが、タイプ B は直接的表現や近接化的表現を用いて共感を形成するものである。これは社交性があり、情報性が低いものから高いものまで含まれ、目的性もそれに応じて弱いものから強いものまで現れるという共感性が強い表現である。最後に、準交感発話は、典型的交感発話と疑似交感発話のように、強い交感機能は持たないが、人間関係の構築と維持にも貢献している表現である。そして、特に注意したいのは、準交感発話には「共感性」が存在しないため、一方的なものであるということだ。

典型的交感発話、疑似交感発話と準交感発話を見極める基準は、表現形式だけではなく、使用場面における社交性、情報性、発話内の目的、共感性の要素と合わせて見る必要がある。

#### 4.2 初対面における会話開始部の交感発話について

本節では、上記の交感発話の分類をもとに、初対面における会話開始部の交感発話を考察する。そして、滝浦（2016:80-85）で述べているアプローチを参照した上で、社会語用論の視点から分析し、その性質・位相・動機づけを明確にすることを目的とする。

まず、会話の開始部はどのように決定すればよいかを説明する。われわれの会話は人と出会ったら、直ちに要件の説明に入ることもあるが、普段なら出合いは出合いのあいさつをし、その後、話を開始する時の前置きをしてから要件に入り、要件が終了したら、終了する話をして、それから別れるというのが通常の会話の手順である。よって、本研究では、会話の構造は①「出合い」②「話を開始する」③「要件」④「話を終了する」⑤「別れる」という五つの部分に分け、①と②の部分に現れた交感発話を考察する。

そして、初対面会話でも実際に会話をする前に相手の情報を有している場合と有していない場合がある。また、店員と顧客のように会話参加者の間に明確な役割関係を有している場合もある。それぞれの場面を考え、三牧（2013:4-5）を参照した上で、初対面時の会話場面を主に下記の四つに分類した。この中の場面タイプ A と場面タイプ C はさらにそれぞれ二種類に分類して分析を行うことができる。

- A. 直接会話するのは初めてでもその会話の相手に関する情報を既に有している場合
  - A1: 直接会話をする前に、会話の相手の噂を耳にしたことがある場合
  - A2: 直接会話をする前に、会話の相手と面識がある場合
- B. 制度的な枠内における会話参加者の役割関係が明確な場合、例えば医者と患者、店員と顧客など
- C. 社交的な場面で純粋に個人対個人として未知の相手と一定時間において自由に会話をする場合
  - C1: 会話の相手に関する情報を有していない場合
  - C2: 会話の相手に直接会う前に、SNS で交際したことがある場合

#### D. 未知の相手に対して依頼がある場合

##### 4.2.1 場面タイプ A における交感発話

本節から実際の会話例をもってそれぞれの発話形式及び意味内容を分析する。場面タイプ A は、実際の会話前にその会話相手に関する情報を既に有している場面である。これをさらに A1：直接会話をする前に、会話の相手の噂などを耳にしたことがある場合と A2：直接会話をする前に、会話の相手と面識がある場合に分けることができる。これらの場面において、「はじめまして」「こんにちは」などありふれたあいさつ言葉が多く用いられる。

まずは、直接会話をする前に、会話の相手の噂などを耳にしたことがある場合の例を見る。

(16) 突然訪れた夫の同僚 B (30 代男) に対して、初対面の妻 A (30 代女) が気まずい気分を和らげるために、自ら進んで相手にあいさつをしている。

A：はじめまして、家路の家内です。

B：あー、どうも、家路と同じ会社で働いているアタミと申します。

A：どうも、はじめまして。

B：はじめまして。

『アイムホーム』 6 話

(16) は会話の「出会い」の時に現れる発話である。この場面では、主人公が週末に家族団らんのために郊外の別荘に行っている時、会社の同僚たちも事前に断らずに訪れてきた。そして、同僚たちも一緒にバーベキューに参加しようとした。せっかくの家族だけの週末が邪魔されるのをみて、主人公が妻 A に申し訳ないと思っている。妻 A は主人公の気持ちを配慮して、「全然（大丈夫）、みんなで一緒に遊ぼう」と言いながら初対面の同僚たちにあいさつしに行った。(16) はその中の一人が妻 A のあいさつに返事した時の会話である。また、妻 A と同僚 B が実際に会話を行う前に、妻 A の夫を経由して情報を得られている。

この中の会話をみると、「はじめまして」は、日常生活のあいさつ表現として用いられているのが周知である。しかし、なぜこのような形式的なことばが必要であるのかというと、交感的な言語交流という視点から考える必要がある。妻 A は夫と同僚たちの面子をつぶしたくないと思い、気まずい雰囲気を破けるために、「はじめまして」と言い出して、自己紹介をした。それを引き受けた同僚 B は、妻 A の自己紹介に続けて、自分も「どうも」と言いながら名乗りをした。それで、妻 A は再び「どうも、はじめまして」と返答をし、同僚 B も同じく「はじめまして」と返事をした。

また、次のような「直接会話をする前に、会話の相手と面識がある場合」の例もある。下記は、日常生活でよく見受けられる会話例である。

(17) 第三者より相手のことを紹介される時、相手の顔を知っているが、相手も私のことを認識しているか確認が持てない。

D：こちら、〇〇さんです。

W：(廊下でよくすれ違う人だと認識) あ、はじめまして、というか、廊下でよくお見かけします。

A：あ、本当ですか！ はじめまして、よろしくお願ひします。

(17) のような顔は知っていても、話したことのない人には、直接会話をする時、開始部に「はじめまして」を使う傾向がある。「はじめまして」は「はじめてお会いします」、もっと謙遜な言い方でいうと、「はじめてお目にかかります」という意味が入っていることばであるが、形式化の「はじめまして」だけを用いることは既に慣習化となっている。それによって、情報性もほとんどなくなったが、初めて会話をする人たちや初対面の人にとって、その言葉を用いることによって相手に対して善意を表し、沈黙の気まずさを解消できる。そのほか、(16) のようにお互いに「はじめまして」とあいさつをした後、相互に相手の存在を認めることで、現場の不愉快な雰囲気も和らげている。

これまでの交感発話の分類に従ってみると、このようなあいさつの時に使われる、情報性の低い、かつ相手との共感を形成し、親和力を向上するためのことばは典型的な交感発話である。また、「はじめまして、どうも⇔どうも、はじめまして」のように双方向的に同様のことばで繰り返す特徴がみられる。そして、このような場面では、話し手と聞き手が両方とも積極的に仲間関係を作り出している。

上記の例をみると、場面タイプ A での交感発話は典型的な交感発話の主たるものとして現れることが明らかである。この場合の交感発話は、「場面や人間関係から予期される、「デフォルト (初期値)」としての期待の水準である」(滝浦 2016:81)。そのため、無標のポライトネスととらえ、標準ないし規範の位相だと位置づける。そして、定型性のある決まり文句が用いられて相互に発話することがあるため、双方向性という性質を持っている。また、このような場面では、話し手も聞き手も無意識的に決まりきった用語であいさつをし、同じ団体での絆を作りだすのである。動機づけとしては「受動的」ととらえる。

#### 4.2.2 場面タイプ B における交感発話

次は、会話参加者の役割関係が明確な場合の会話である。主に「こんにちは」を用いる会話が多い。「こんにちは」は「今日は……」の実質部分を取り去って形骸化させた形式であり、より一層新情報のないことばと言わなければならない (滝浦 2013)。このような、情報性が少なく、人間関係の構築に貢献し、形式化したことばは「はじめまして」と同じように典型的な交感発話に属するあいさつことばとする。

(18) インフォメーションセンターの受付のところに、スタッフ E (20 代女) がセンター内に入ってきたお客さんに対してあいさつをしている時、ちょうど一人中年層の G (40 代女) がやってきた。

E：こんにちは。[出会い]

G: こんにちは。すみません。私は用事で札幌に来て、[話を開始する]

E: はい。

G: 今お昼に着いたばかりですが……ここでは大学の寮歌の楽譜を売っていますか。

(18) はインフォメーションセンターの受付の場面で、職員 E とお客さん G はお互いの役割分担を明確に把握している。スタッフ E が来客に対して、遠いところから「こんにちは」と声をかけてから、それに気づいた客 G が受付のところによってきた。G はまず同じように「こんにちは」と返事してから、「すみません」を用いることによって、要望があるとスタッフに暗示している。この時、「こんにちは、すみません」という連続的なことば形式が用いられた。「すみません」の用例は後続の場面でまた詳しく分析するため、ここでとりあえず「こんにちは」に集中してみる。

インフォメーションセンターの受付のところでは、スタッフと来客の役割が明確となっている。それは情報提供と情報求めの関係である。こういう公的な場では、初対面の会話が会話を始める際に、より典型的な交感発話を使用する確率が高いと見受けられる。すなわち、「こんにちは」はあいさつの形式的なことばとして用いられることが強く反映される。また、典型的な交感発話は、双方向的に使用することによって、話し手と聞き手両方とも進んで和やかな会話雰囲気を作り出しているのがみられる。よって、これも標準ないし規範の位相であり、無標のポライトネスだととらえる。

#### 4.2.3 場面タイプ C における交感発話

場面タイプ C は、社交的な場面で純粹に個人対個人として未知の相手と一定時間において自由に会話をする場合である。本研究では、さらに C1: 会話の相手に関する情報を有していない場合と C2: 会話の相手に直接会う前に、SNS で交際したことがある場合に分けて考察する。まずは、社交的な場面において会話の相手に関する情報を有していない場合の例を見る。

(19) 込み合っている電車の中で、女性 C (70 代) が隣に立っている赤ん坊を抱えている女性 D (30 代) に対して声をかけた。

C: (隣の席を指しながら) こちらにどうぞ。

D: あ、ありがとうございます (相手にお礼を言いながら席に座った)。

C: (赤ん坊を見て) かわいいですね～目がくるくるしてて～。

D: (笑) ありがとうございます。

この場面では、会話参加者は事前にお互いの情報を把握しておらず、制度的場面における役割も分担していない。課題を遂行する目的は持たず、自由な会話である。(19) は、電車の中の人が多く、座る場所もない場面の会話である。専用席に座っている女性 C が隣に立っている女性に対して、「こちらに座ってください」との意味を込めて声をかけた。女性 D は、「ありがとうございます」とお礼を言い、席に座った。

そして、女性Cが女性Dの赤ん坊をかわいいとほめる発話をしている。

(19)のような場面の会話が短いが、次のようなことが特徴的だとみられる。第一に、会話のきっかけを見る必要がある。とりわけ依頼や課題などを遂行する目的を持たない場合、未知の相手と会話するには何かの契機を条件としなければならない(時には、視線の合わせも会話の契機になる場合がある)。例えば、(19)は席を譲る場面である。それをきっかけにして、女性Cと女性Dの会話を始めた。第二に、会話の内容を注意することである。初対面である二人は自由に話を交わる時、政治、宗教、私事など敏感な話題を避ける必要がある。そのかわりに、天気のような当たり障りのない話、一致しやすい無難な話題を提供したりする。(19)は相手の赤ん坊のことをほめ、話者同士間の心に通じ合うような話題をした。女性Dはそれを引き受けて「ありがとうございます」という感謝の言葉をした。

ここで特に注意を向けたいのは「かわいいですね、目がくるくるしてて」という赤ん坊の話題の部分である。これは、未知の相手と会話をする際によく用いられる雑談であるにとらえられる。初対面の人の間に何かの絆を作る時、雑談をすることによって相手との対人距離を縮めることが人間関係の最初の一步だと考えられる。ここでの「—かわいいですね、目がくるくるしてて。—(笑)ありがとうございます」というような雑談は、命題内容上に共通性を持つような表現ではないが、相手の赤ん坊の外見に注意を向け、ポジティブ・ポライトネスでの共感の機能を果たした表現である。よって、これは疑似双方向的な疑似交感発話である。

また、この場合は、話者が意欲的に交流し、積極的にその場の雰囲気や調和することがみられる。そうした話者が相手に対して好意を示し、意図的に近接的表現を用いることは、有標のポライトネスであり、動機づけとしては「能動的」である。そして、標準や規範から見れば、動機づけられた偏移ないしずれと言うことができよう。

(20) SNSでは明確な親交があるけど、実際に会ったことがない人と初めて会った時、あいさつしに行った。

A: ○○さんですか? はじめまして××です。いつもツイート拝見しています〜。

B: あ、××さんでしたか。はじめまして! こちらこそ、ツイッターではいつもお世話になっています(笑)。

(20)は、直接会って会話をする前に、すでにSNSで交流したことがある場合の会話である。この場合は、虚偽世界と現実世界の相違のことである。相手と虚偽世界で連絡したことはあるけど、現実世界ではまだ初対面のことである。現実世界で会話をする時に、改めて初対面の場合の会話プロセスに従って話をしなければならない。よって、話者は相互に身分を確認してから、典型的なあいさつ用語「はじめまして」で会話を開始した。そこで、相手と現実世界での認識プロセスを完成し、話者同士の存在を認めることになった。会話のシステムが確立した後、これまでのSNSでの交流に関する謝意を表した。

ここで、典型的な交感発話は、場面や人間関係に応じて黙認されている設定値で出力することが改めて明らかになった。虚偽世界と現実世界が並行している中、人間もそれに依って言語行動をとっている。よって、この場面での交感発話も標準ないし規範の位相で、かつ「受動的」な動機づけが特徴となる。

#### 4.2.4 場面タイプ D における交感発話

この節では、未知の相手に依頼がある場合の開始部の会話を論じたい。次の例を挙げる。

- (21) キャンパス内で、観光者 K (60 代女) が道端で歩いている学生 G (20 代女) に、写真を撮ってもらうようお願いをしている。
- K: あのう、すみません。
- G: はい。
- K: ちょっと私たちに写真を撮ってもらえますでしょうか。
- G: はい、いいですよ。

「すみません」の意味機能に関して、これまでの先行研究でよくみられる分析は「謝罪」「感謝」「前置き」「注意喚起」の機能である(森山 1999、小森 2001 ほか)。そして、「あいさつ」として分類されることもみられる(甲斐 1984)。本節では、「すみません」の交感機能を考察する。

(21) は初対面時の依頼場面であり、かつ会話参加者が制度的な場面での役割分担をしていない。キャンパス内の道端で歩いている学生 G は観光者 K とはもともと無関係の人である。その場合、何かの関係を築きかけや見込みもない。そのような、そもそも無縁の二人が何かの関係を構築しようとする時は、偶然の出来事が現れた確率が高いとみられる。観光者 K はお願い事があり、偶然自分の隣を通り過ぎた学生 G をつかまえようとし、相手の注意を喚起した。そのため、先に口に出したのは「あのう」という言葉である。「あのう」を使う原因としては、学生 G が観光者 K のことを気づいていないからである。それは、Laver (1975:219) で分析された交感的交流の相互作用の開始部にある連鎖的動作の一つ、「目の交わり」作業が始まっていないということである。よって、「あのう」を用いることによって、「目の交わり」作業を開始させ、次のやりとりのための段階的な準備ができた。「あのう」も普段みられる人名呼称のように、相手呼びかける時に用いられ、相手の注意を喚起するとともに、相手との距離を縮めることができる表現である。この表現はフィラーの機能を持ち、よく「すみません」と連ねて用いられる。

観光客 K が「すみません」を用いることによって、「ちょっと伺いますが、教えてほしいことがあるんですが」という意味を表わしている。これは、話を始める時に、前置きとして唐突さを軽減もしくは回避するという役割を持つとの解釈もあるが、許可なく話しかけることについて、あらかじめ謝罪をしているとも理解できる。ただし、この時の謝罪は後続の行為に対する事前動作で、通常の本格的な謝罪行為とは異なる

ものである。「呼びかけることは声で相手に触れることであり」(滝浦 2008:115)、初対面の人に対しては直接触れないように、「敬避的配慮」(滝浦 2008:27)をしながら発話をしているという側面もみられる。よって、ここでは、謝罪言葉の転用として解釈を加えたい。これまでの分類では、謝罪言葉は発話行為の目的が強いため、準交感発話として扱えることが分かる。また、この「すみません」は「こんにちは」のように、同様のことばで言い交わすことはないため、「一方向性」として扱うものと考えられる。

上記の分析をみると、未知の相手に対して依頼する場合、開始部において謝罪言葉が転用された準交感発話がいられやすいことが分かる。この場合は、話し手は依頼があるため、相手に進んで声をかけるのであるが、初対面でかつ依頼をするのは相手の自由を邪魔するものであり、話し手は配慮を払いながら間接的に発話をしている。そうした半ば近接的半ば遠隔的な使用の動機づけは受動的～能動的の「中間」にあるものと言えよう。交感機能もそれとともに下がる。また、こちらでの「すみません」は本来の謝罪行為の意味とは異なったため、謝罪ことばの転用で一種の「変化」という位相に位置付けたい。

## 5 おわりに

本研究では、交感発話の認定と分類をした上で、社会語用論の視点から初対面時の四つの場面における会話開始部の交感発話の特徴と機能を明らかにした。

場面タイプAの「直接会話をする前に相手の情報をすでに有している場合」と場面タイプBの「制度的な場面の役割関係を持つ場合」において、典型的な交感発話がいられやすい。そして、「はじめまして」「こんにちは」「おはよう」のような「双方向性」がある典型的な交感発話は、標準ないし規範の位相であり、動機づけとしては「受動的」ととらえる。

場面タイプCは、「社交的な場面において個人対個人の自由な会話をする場合」であるが、相手の情報を有していない場合の疑似交感発話の使用と相手とSNSで連絡したことがある場合の典型的な交感発話の使用がみられた。典型的な交感発話は前述したとおりのものであるが、疑似交感発話は、意図的に近接的な表現を用いることによって、その場の雰囲気や調和することが見受けられた。発話には形式性を持たないが、機能上に共感をもたらしたため、「疑似双方向性」の発話となる。動機づけとしては「能動的」である。位相は、標準や規範に対する偏移ないしずれに位置付ける。

最後は、場面タイプDの「未知の相手に依頼がある場合」である。この場合は、準交感発話の用法がみられた。開始部において謝罪言葉が転用されることによって、遠隔的な言語使用で相手に近づいている。そうした半ば自ら進んで近接し半ば控えめに遠隔的な動機づけは受動的～能動的の「中間」にあるものと考えられる。これは、典型的な交感発話のように共感性は当てはまらないため、「一方向性」の発話とする。また、謝罪ことばの転用で、交感機能が下がったこともあり、変化の位相に位置付けた。

よって、本研究の結論を表2に示すことができる。

表2 初対面時の四つの場面における交感発話の特徴

|                  | 性質     | 位相      | 動機づけ |
|------------------|--------|---------|------|
| 典型的交感発話          | 双方向性   | 標準ないし規範 | 受動的  |
| 準交感発話            | 一方向性   | 変化      | 中間的  |
| 疑似交感発話<br>(タイプB) | 疑似双方向性 | 偏移ないしずれ | 能動的  |

本稿では、初対面時の会話開始部における交感発話を分析するにあたり、ごく一部の現象を扱ったに過ぎない。しかし、交感発話は初対面のほかにも、知人と会話する時などさまざまな場面でみられる。このことを踏まえて、今後の研究の方針として、初対面から知人関係の場面に広げることも考えている。また、会話の開始部だけでなく、その中心部や終結部における交感発話に対しても考察することを考えている。

## 参考文献

和文

- 加藤重広 (2004) 『日本語語用論のしくみ』 研究社。  
 ——— (2015) 「発話的な効力と発話内的な効力—日本語の疑問形式を出発点に」、  
 『日本語語用論フォーラム1』、27-56、ひつじ書房。  
 ——— (2016) 「総説」、加藤重広・滝浦真人 (編) 『語用論研究法ガイドブック』、  
 1-47、ひつじ書房。  
 甲斐睦郎 (1984) 「現代日本語のあいさつ言葉について」『国語国文学報』42、177-190、  
 愛知県：愛知教育大学国語国文学研究室  
 小森万里 (2001) 「『すみません』の意味・機能」、『近畿大学語学センター紀要』10(1)、  
 14-32。  
 肖 潔 (2019) 「あいさつとあいさつ表現の判断基準及び分類に関する考察—日本語  
 の視点をもとに—」、『研究論集』19、233-243、北海道大学大学院文学院。  
 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』 研究社。  
 ——— (2013) 『日本語は親しさを伝えられるか』 岩波書店。  
 ——— (2016) 「社会語用論」、加藤重広・滝浦真人 (編) 『語用論研究法ガイドブッ  
 ク』、ひつじ書房。  
 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ  
 —』 東京：くろしお出版。  
 森山卓郎 (1999) 「お礼とお詫び—関係修復のシステムとして」『国文学 解釈と教材  
 の研究』44(6)、78-82 東京：学燈社。

欧文

- Brown, P. & Levinson, S (1987 [1978]) *Politeness: Some Universals in Language*



- Usage*. Cambridge University Press. (邦訳：田中典子監訳、斎藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳 (2011) 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』 研究社)
- du Bois, John. W (2014) "Towards a dialogic syntax". *Cognitive Linguistics* 25 (3), 359-410. De Gruyter Mouton.
- Firth, J. R (1935) "The Technique of Semantics". *Papers in Linguistics 1934-1951*, 1957, 7-33 London: Oxford University Press. (邦訳：大東百合子 (1978) 『ファース言語論集 I 1934-51』 J. R. Firth 著、研究社)
- (1951) "General Linguistics and Descriptive Grammar". *Papers in Linguistics 1934-1951*, 1957, 216-228 London: Oxford University Press.
- (1964) 'Context of situation'. *The Tongues of Men and Speech*. In R. Mackin, & P. D. Stevens (eds), *Language and Language Learning*, 110-114. London: Oxford University Press.
- Laver, John (1975) 'Communicative Functions of Phatic Communion'. In A. Kendon, R. M. Harris, & M. R. Key (eds), *Organization of Behavior in Face-to-Face Interaction*, 215-238. Paris: Mouton. The Hague.
- Malinowski, B (1923) 'Phatic Communion'. *Communication in Face to Face Interaction, Selected Readings*. Edited by John Laver and Sandy Hutcheson, 1972, 146-152, Great Britain: Penguin Books
- Searle, John. R (1969) *Speech Acts*, Cambridge: Cambridge University Press. (邦訳：坂本百大・土屋俊訳 (1986) 『言語行為』 勁草書房).
- (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*, Cambridge: Cambridge University Press. (邦訳：山田友幸監訳 (2006) 『表現と意味』 誠信書房).
- Schegloff, Emanuel A. and Harvey Sacks. (1972) Opening up Closings, *Semiotica*, Vol. 7, 289-327. (邦訳：北澤裕・西坂仰 (1995) 「会話はどうのように終了されるのか」 『日常性の解剖学』 マルジュ社).
- Schegloff, Emanuel A. (1988) Goffman and the Analysis of Conversation. In P. Drew and A. Wooton (eds.) *Erving Goffman*, Cambridge: Polity Press.

用例

テレビ朝日系ドラマ 『アイムホーム』 2015

(しゅう けつ・北海道大学大学院博士後期課程)